夕刊

六月十八日發行

定價一ヶ月金五拾錢（郵送料金六拾錢）
廣告料金　普通欄　一行一回　金六拾錢　特殊欄　一行一回　金九拾錢
（日曜祭日翌日休刊）
編輯兼發行人　磐城新聞社　代表者　木村哲
印刷人　磐城新聞社　代表者　木村哲
印刷所　磐城新聞社
登録名義　磐城新聞（ヘライヤワ）
電話　第五五六四番

途上漫筆（九）

小野生

六十二議會の通過を見た明治神宮に二三日間の斷食祈願をなして、本案の通過を願つたと云ふ熱あり誠あるの老武士であるが、氏は本案通過を見ては更に大なる喜びを以て氏自身は頽齡幾何の餘年なきを以て如何ともなし難きも、最近の傷病者に對しては、蘇生の感ありと、聲涙共に降つて其實現を悅むだのである。

更に氏は此通過を以て足りとせず、飽まで恩給法の改正まで、努力を拂ふ可しとなし、不日草鞋履きにて全國を行脚せむとする元氣を見せて居るが、軍人に對する世間の待遇が正に薄らきむとせんとするの時に氏の此活動は、或意味に於て充分の反響を齎す事と なるであらう。（六月十七日稿）

傷兵優遇案が、其後に至るまでの經路に對して、隱れたる努力奔走したる恩人あるを忘れてはならぬ、傷兵は國家危急の戰時に死を省みず君國に身を捧げて、名譽の負傷の爲めか、若くは公務に於ける、傷病に依つて、全く軍籍に在る事能はざるものが、即ちこれである。

然るに世人は此等の犧牲者をして、果して如何に觀て居つたか、傷兵諸君は自ら國家の待遇に甘んじて、窮乏と戰ひ今日に至つたのであらうが、身體健全のものすら失業の浪に漂ふ有樣であるから廢兵諸君の苦腦は又格別とせられたのであるが、其れを如何にせば適切なる優遇が出來得るかは識者の研究措かざる所であつたのであるが、その茲に至る大正十二年以降幸々として其根本たる恩給法の改正を叫び、路傍になく同病者の爲めに苦力絶叫したる小野道直氏を發見した今、本案の通過と共に其努力に對し感謝の意を表すべきものであらうと思ふ。

氏の語る處に依ると、氏は日露交戰の時、明治大帝の股肱となつて身命を捧げたのであるが、不幸にして生き殘り、傷へ廢兵として徒食するの己むなきに至り既に六十の老を養ひ得たるは、皇恩霑被に依る處なるが、傷兵を出するの道は遺憾なしとせぬ、殊に滿洲事變に依つて見るも此感を深ふしたので、國家の干城たり、傷兵の爲めに待遇改善の道を講ぜられ可く、昨年七月全國の同志と語らひ、『私はまひどになつた小鳥です。どうぞ一晩とめてください』と小鳥が云ひました。

『さあさあ、どうぞおとまりください』

この木をめがけてとんで來たつぶらあるおいしい木の實でした。小鳥は其れを食べるとすつかり元氣になりました。そしてお禮にピンカラピンカラ、遠い野の唄をうたつて聞かせました。

日が暮れました。小鳥は木の葉にかこまれた居心のよい枝にとまつてうつとりと眼をつぶつて居ました。

『おやすみになれますか、小鳥さん！』

赤くて、あまくて、汁の

時代曙語

○志立たざれば天下成るべきの事なり、百工技藝と雖も未だ志に基かざるものあらず、志の立たざるは舵なきの舟、銜なきの馬の如し、漂蕩、奔逸何の底まる所ぞや……（王陽明）

童話　赤い木の實

千葉省三

（上）

大きな町の中に一本の大きな木がありました。この町の木といふ木はみんないちけて、お雜巾のやうによごれてゐましたが、この大木ばかりはいつも美しく綠色に繁つて、燈臺のやうに高々と町の空にそびえてゐました。

ある夕方、一羽の小鳥が弱々しく羽ばたきしながらてくれました。

大木は、繁つた葉をひろげて、小鳥をふところに入れてくれました。

『私は、のどがかわいてたまらないのです。どうぞその實を少したべさせてください』と小鳥が云ひました。

『さあさあ、どうぞおあがりください』

大木はたくさん實のついた小枝を、ゆすぶつて敎へてくれました。

消便集

島田忠夫

○市原里川先生に

菅の根の久しくもたよりまゐらせぬなとがめ給ふな旅ゆえにわれは

○さす竹の君忘れれど日日のわれの修業のやすからなくに

○ほろけくも思ほゆるかもうま酒に醉ひ唄ふ君とさかりつつ居れば

○ひたちのや大津なとめのはしきやし和面みしかば歟忘れけむ

○いばらきに君が作らすよき歌もこの頃みれば吾が寂しめり

○さす竹の君がつまのきみ病ひいかに心にかかり音ふ事もなし

○田村先生の醉ひしあか面もみざる故久しと云ひむ心寂しも

拈華微笑

孫子の代迄させまいもの、執達吏、收稅官吏、追加。養蠶

◇

自棄か悲鳴か、一そ野菜を肥料に。と云ふ農民

◇

町當局近來の上粹道。來月の擴張工事竣功式

◇

つゆ時に見つけものの明日曜才で四十八兩の借金。赤ん坊も緩く無くなつた

◇

エビつ垂れの分ふいに大木が聲をかけました。

小鳥は眼を開きました。あたりはまつくらでした。夜風がサラサラと梢を渡つて居ました。

ありがたう、お蔭樣でゆつくり休ませていたゞきます。ほんとに、あなたが

『若先生と祝言打つでねえかよ、此の果報者ッ！』

『あらまあ！』

『誰つて、お前さまのさ』

呆れて返辭をせぬお柳の大なのも善惡偶には叱言を仰しやつても良さそうなものだのにと、寧ろ其の放任過ぎるのを怨まれる位だつた。

『あれとばけてるよ、此人は……我のことを誰だなんてハア訊く間抜けもないもの。』

斯うなると愈々責任の重いのを自覺されて落度がない樣にと絶えず我を省みて仕事に一層精を出すやうになつた。

半月ばかり經つと、もう年の闌である、人の出入りが頻繁な屋敷だけになんのかのと投げ出す樣に群つて來る用事が息も吐かせず八方から責め立てる、それがお柳にとつて愉快でならなかつた、自分の家庭でもある如く一心になつて片付けて行くのが今までに覺えぬ娯樂であつた

惡ける程の用事は凡て自分に任せ切りで干渉がましい一つきかぬ、こんなに寬大なのも善惡偶には叱言を仰しやつても良さそうなものだのにと、寧ろ其の放任過ぎるのを怨まれる位だつた。

斯うなると愈々責任の重いのを自覺されて落度がない樣にと絶えず我を省みて仕事に一層精を出すやうになつた。

半月ばかり經つと、もう年の闌である、人の出入りが頻繁な屋敷だけになんのかのと投げ出す樣に群つて來る用事が息も吐かせず八方から責め立てる、それがお柳にとつて愉快でならなかつた、自分の家庭でもある如く一心になつて片付けて行くのが今までに覺えぬ娯樂であつた

顏を見た、とお松は、『若先生と祝言打つでねえかよ、此の果報者ッ！』

『あらまあ！』

『まあ、それはほんとうですか』

『本當ですとも』と大木は悲しさうに答へました。

『だから、今夜は私の最後の晩なのです、それでいろ〳〵と昔のことが思ひ出されて、どうしても睡れないのです。小鳥さん私の身の上話を、聞いてくれますか！』

『ねね、どうぞ聞かせてください。』

小鳥はびつくりして叫びました。

小鳥は、もうすつかり眼がさめてしまつて、羽づくろひをしながら大木の話に耳を傾けました。

——それは、今から五百年も前の事なのです——。

と、大木はしづかな聲で語りだしました。

——南の國から、ひろいひろい海を越えて飛んで來た、一羽の渡り鳥がありました。

——其の渡り鳥は、大せいのお友だちといつしよに南の國をたつたのでしたが途中であらしにあつて、羽をいためたために、仲間におくれて、たつたひとり北の方をさしてさびしい旅をつゞけてゐたのでした。

社會の今日

○

何と云ふ靜かな晝だゝ一人こぼれ出す湯を見てはいつてる

矢代東村

石嵩や山水ここに迸る

季發

講談　お蘭陀お蝶

（59）

渡邊默禪作

布施長春畫

御目見得が濟んで小さな部屋一つをあてがはれて持物の整理を夫々つけて了ふと稍々体が落ち着いて初めを切つてゐると、お松は突然に

『お柳さま、お前さまにちと、そげえに白を切るならこの屋敷の御新造樣になんだ』

『へえッ！』

その頃からして、ふつと寧ろ馬鹿律義な極めて罪妙な思ひが胸に湧いた一沐のない女である

『ちよいと松どん、何を言ふ』

そんな幽かな影であつたとつてゐるの』

其の影がだん〳〵濃くなつて、はつきりと意識せられるやうになつた、でも忙しい時には忘れる、忘れて居たかと思ふと夜などの心のない、妙だわね、何か履沈んだ折に又映る、絶えずき遠にてゐるんでせう』

消えつ現れつしてゐた。

明日は大晦日と言ふ日、お柳は下女のお松といふのの足は十三文甲高、履き遠の足袋や下駄では間に合はぬ、そげえに白を切るならこの屋敷の御新造樣になんだ

『へヘン、僅りだけんど、俺ひたくつてもハア人間並の心地の良い屋敷で別に氣兼ねをすべき朋輩もゐず、主人を初め格之助、侍衆、門弟までが言ひ合せた樣に物優しくいたわつて呉れ、勝手から奥向きまで女の手に

『えッ！』

『えッ、祝言？どなたの』

お柳は不意打ちに驚いてんべえ

『若先生と祝言打つでねえかよ、此の果報者ッ！』

『あらまあ！』

ラヂオ

…十九日…（日曜）…

仙臺　JOHK

△前九、〇〇A　氣象

△九、一〇A　榮養料理（胡瓜を爭ふ盤と牛）榮養研究所

△九、三〇A（子供の時間）お話（小布の造花）大妻コタカ

△一〇、〇〇C　宗敎講話（觀音の三味と日常生活）大槻快尊

△一〇、〇〇A　獻納飛行機愛國號命名式狀況（代々木練兵場より）宗敎講話無き場合に限り

△一〇、四〇A　講演（未來の空中戰）帝國飛行協會總務理事陸軍中將四王天延孝

△一一、一〇A　謠曲講座（謠の道しるべ）實演：觀世左近　解說：池內信嘉

△正午A　時報　氣象

△〇、三〇A　ニュース

△〇、五〇　三、三〇A　放送歌劇（カルメン）ヴォーカルフォア合唱團（新交響樂團練習所より中繼）

△三、三〇　競馬中繼（社團法人福島競馬クラブ主催春季競馬會狀況）福島市競馬場より中繼

△三、四〇A　氣象と經濟市況

△四、〇〇　ニュースは競馬放送終了直後に繰下げ放送す

△六、〇〇（子供の時間）マンドリン合奏と獨奏　東北帝大マンドリン倶樂部

△六、三〇　講演（千古獨見の士林子平先生を憶ふ）塚田新一

△七、〇〇A　ニュース　氣象　生繭相場

△七、三五A　名曲鑑賞河東節（一、由緣江戸櫻　二きぬた）解說：笹川臨風

△八、四五A　ラヂオドラマ（短夜）久保田萬太郎作出演：築地座

△九、三〇A　時報　ニュース　氣象　生繭相場

△一〇、〇〇C　宗敎講話

△一〇、〇〇A　獻納飛行機愛國號命名式狀況（代々木練兵場より）宗敎講話無き場合に限り

△一〇、四〇A　講演（未來の空中戰）帝國飛行協會總務理事陸軍中將四王天延孝

△一一、一〇A　謠曲講座（謠の道しるべ）實演：觀世左近　解說：池內信嘉

△一一、一〇A　謠曲講座（謠の道しるべ）實演：觀世左近　解說：池內信嘉

△一一、一〇A　謠曲講座（謠の道しるべ）實演：觀世左近　解說：池內信嘉

△一一、一〇A　謠曲講座（謠の道しるべ）實演：觀世左近　解說：池內信嘉

△一一、一〇A　謠曲講座（謠の道しるべ）實演：觀世左近　解說：池內信嘉

忘れようとて

忘れようとて
野路を行けば
あの山この山
あかあ暮

今日もとつぷり
日がくれました
かなしかなしと
鳥がなく

（六、一五）

（民謠）ないてなかれて

鈴木英夫

ないてなかれて
いもうとは
くらいなみだを
しりました

むかしになれと
いはれても
それはごもりよ
おにいさま

ないてくらした
いもうとは
つらいせけんを
しりました

ないてなかれて
いもうとは
くらいなみだを
しりました

ないてなかれて
いもうとは
くらいなみだを
しりました

ないてなかれて
いもうとは
くらいなみだ

上水道擴張竣功式は大体來月中旬と内定

平小鐵。鋪裝促進のプランも立つ

萬事運ばれた昨日の平町會

平町會は昨十七日午後二時から開催、上水道擴張工事の殘務整理費千三百九十九圓と來月中旬頃竣功式擧行の件を可決し、尙は平小鐵道國道鋪裝の實現運動に左の委員を擧げ近く鈴木代議士と共に最後的の猛運動を起す事となつた

△平小鐵道委員　佐々木吉田、青沼

△國道鋪裝　大森、花澤荒川(恒)

孫子の代まで

蠶は飼はすまい

甚しい缺損の菊田方部

植田町方部の春蠶は何れも既に上簇し二十日前後に收繭の模樣だが現在の如き繭價安に反し比較的高値の桑葉を購入した關係から諸雜費を差引くと却て欠損のものが多く一部には孫子の代まで蠶はやらせまいと悲鳴をあげてゐる者さへある狀態で一般に悲觀されてゐる

赤ん坊でも一人當り四十八圓

郡民の借金調べ

郡町村長支會の調査による郡下二萬七千五百戶、二十萬六千百人の負債額は去月末日現在で農工銀行本支店の三百九十二萬圓を筆頭に合計九百九十萬圓の巨額に達して居るが之れが一戶當り三百六十圓一人當り四十八圓であると

簡易保險の團体加入奬勵

中局では簡易保險の解約失効を防止すべく十五人以上の團体に對して五分の割引制度を定め目下大童で之を奬勵してゐる爲從來の加入者で團体を組織するもの漸次增加しつつある一面先月中の失効解約も相當あるが右は商人、勞働者、農業者に多く之等に對しては積立料金の振替等によつて之れが中斷を避け失効者には極力復活を促してゐる、尙ほ昨年四月から始めた小兒保險は現在六百七十六口で失効解約なく成績良好である

野菜の馬鹿安に

悄氣返る農家

一そ肥料に。と愚痴る

生産物の暴落に因る郡下農村の窮狀は屢報の如く今やその絶頂に達し目下農繁の爲出廻り薄の時季なるに拘らず野菜類は左の安値で寧ろ肥料にもし度い位であると云はれてゐる

玉菜貫五錢、夏大根十本五錢、胡瓜一本一錢—二錢、鞘豌豆貫十五錢、玉葱貫二十錢、新午蒡五本五錢、菜類貫五錢、馬鈴薯貫十錢、茗荷貫十錢

あす實業野球戰

平商＝磐炭　磐中＝遞友

平倶＝鐵道の快試合

磐陽實業野球大會平商對磐炭界の強豪磐炭と昨年の優勝旗保持者であり平商は最近著しい進境を見せて居るので其の勝敗は多大の興味を以て迎へられてゐる、尙ほ同日は午前九時から平商に於て磐中對遞友、午後平倶對鐵道の試合がある

平町胡摩澤青年團發會式は明十九日午前十一時から同町不動尊遠では貸付に困難を來したので極力回收方法を講じ貸付に支障なきを期する事となつたが返還すべきもの二十五名あり今年の貸付決定は三名であると

發會記念試合

磐中球場に於て開始されるが磐中・平商・遞友・鐵道の四團体は明十九日午前十一時から同町不動尊遠では貸付に困難を來したので極力回收方法を講じ貸付に支障なきを期する事となつたが返還すべきもの二十五名あり今年の貸付決定は三名であると

後三時から左のメンバーに依り磐中で紅白野球試合を行ふ

△紅—佐藤信夫、鈴木澤三郎、伊藤正男、豊島豊佐藤好男、鈴木三郎、蛭田作義、高田五郎、花澤一、伊藤猛△白—鈴木勇男、伊藤勇、白土豊、谷澤吉三、佐藤寛二、八巻慣七、金子保、井上茂、鈴木要次郎、大方慶明、阿部正。。。